〔東洋の古代美術展によせて〕

仏　像　東（とう）　漸（ぜん）

―館蔵品に見る仏像の変遷―

仏像誕生の地ガンダーラの貴重な二点の作品の内、石造二仏供養者像（図１）は２～４世紀頃の寺院の壁を飾ったものと思われ、珍しい二仏の立像を中心に男女の供養者を配したものです。後の「法華経」に言う釈迦と多宝の二仏並坐像との関連も指摘されて興味深く思われます。二仏の風貌には、典型的なガンダーラ仏とは異る地方色が見られ、このパネルがガンダーラ北部のスワート出土というのもうなずけるのですが、更に、その顔にはイランの貴族風に鬚を蓄えているのは古風な様式を伝えています。供養者の内、向って左の男性はパルテイア（古代イラン）風の服装を、右の女性はギリシァ風の衣裳を着る等、ガンダーラが様々の文化の複合地帯であったことが、この小さな作品からでも窺えます。

同じガンダーラの、地方は異って東部のタキシラ出土とも伝えられる塑造の女性供養者像（図2）は、恐らく舎利容器と思われる物を手にして敬虔に膝まずいています。３～５世紀頃のもので、当時の熱心な仏教信者が貴族階層の人々であったことが、この女性の豪華な耳飾りからも窺えるのですが、更に、この女性が若い乙女であるのは、仏教の浸透が当時かなり進んでいたことを物語るようです。そのギリシャ・ローマ風な面ざしのまぶたの重いインド的表現や、イラン風衣裳のワンピースとブーツ、そのワンピースに見られるギリシャ以来のΩ字形衣文などに、現代よりはるかに交通の不便であった時代のたくましい文化混淆の痕跡をかいま見るのです。

インド的影響は中国・北魏時代の延興二年（472）の銘を台座背面に持つ釈迦如来の坐像（図３）のふくれたまぶたや、体軀に密着して水流の如き衣文を持つ偏袒右肩（右肩をほとんど出す衣の着方）の着衣にも見られるのであり、中国仏教の花開いたこの北魏時代の円満華麗な様式が、インドの様式を母体として可能であったのかと思わせます。この像の光背裏に彫られる釈迦誕生と九竜灌水のシーンは、仏像を人間の姿で表わすようになってからのガンダーラ以来の、仏伝図（釈迦の伝記）の伝統に依っているのです。

そして、同じく北魏のもので、台座背面に孝昌二年（526）の銘を持つ石造二仏並坐像（図４）に至れば、その形式は前記のガンダーラ二仏立像（図１）と関係する釈迦、多宝二仏で、当時流行の「法華経」中の釈迦の華かな奇蹟的説話の一片であることが分ります。ここでは、衣裳はも早や全くの中国的通肩（両肩をおおう着方）に胸前紐付きで、インド的影響を脱して中国独自のものを生み出しているのを見ます。その裾を台座の前に垂下させるいわゆる裳懸座の衣裳の起源はどの辺りにあるのでしょうか？この裳懸座が、ギリシャ以来のΩ字形衣文を併って、滔滔（とうとう）として我が日本の飛鳥仏にまで及んだことはまことに感動的です。風貌も飛鳥仏の母胎なることを示しており、裳懸座下に隠れる一対の獅子は、インド以来の台座形式を受け継いでいるのです。

以上のような石仏や塑像の他に、ギリシャ以来の金銅仏の伝統が中国でも花開き、北魏の太和銘（480～490年頃）を台座に持つ金銅弥勒如来坐像（図５）は小像ながら北魏金銅仏の面目を保っています。前記の延興銘を持つ石造釈迦如来坐像に時代的に続くものとして、相貌円満・偏袒右肩の共通要素を持っています。逆巻く渦を有する火焔光背の華麗さ。その光背の裏面には蓮華座上に冥想の禅定印を結んで端然と微笑む釈迦如来の坐像浮彫りがあります。弥勒・未来仏と釈迦・現在仏の厳しい対比と言えましょう。

皇帝の絶大なる威信の下に、次次と穿（うが）たれた北魏石窟寺院の一部と思われる飛天の像（図６）は、竜門石窟魏字洞（６世紀初期）天井飛天と類似し、頑丈な岩肌にかくも女性的な官能の美と極楽的理想郷を彫出したかと思わせます。

飛天は同様に、大唐の石窟形ストューパ（塔）とも言える四面仏（図７）の上壁を散花の姿で荘厳し、それぞれ異る姿勢をもって表現された天の四方の四仏、釈迦・多宝二仏並坐像（東）、無量寿坐像（西）、定光立像（南）、弥勒倚像（北）の浄土の内に、鑑賞者の心を引き入れます。浄土を枠取る龕形と同形のくり抜きが台座部分にも見られ、そこでは各々の龕の中に一人ずつの楽天が天の交響楽を奏でており、その響きは立ち昇って龕中の仏の世界を満たし、円形屋根形の上にかつてはあったと思われる九輪（九つの輪を重ねた飾り）の頂上をも越えたかと思われます。盛唐から晩唐へかけての名品であります。

図1　石造二仏供養者像

図2 塑造女性供養者像

図3　石造釈迦如来坐像

図4　石造二仏並坐像

図7　石造四面仏

図5　金銅弥勒如来坐像

図6　石造飛天像

金銅製の六臂の如意輪観音坐像（図8）も盛唐の立体的描写を伝え、新たに興った密教像の森厳さの中に女性的官能の世界を極立たせています。この姿も、源をたどれば、インド古代神に行きつき、果てはわが国にまで及んでいるのです。

中国辺境の地と陸で続き、海を隔てて隣り合う韓国は、中国仏教を日本に仲介した因縁深き国でありますが、その三国時代古新羅の金銅薬師如来立像（図９）は北魏仏の影響を強く示し、形体はインドに盛行した偏袒右肩薬師像の南伝（東南アジア経由による影響）を示すとも言われています。同じ韓国でも、統一新羅時代金銅釈迦如来立像は、それとは対照的に細く扁平な体軀と二段に重ねた台座の中に、この時代の繊細華麗な様式の一面をのぞかせています。

このようにして、我が国にはるばる到達したインドの仏像の流れは、飛鳥より奈良時代にかけてその影響をはっきりと現わし、小塼仏（形取りし、素焼きした土の仏像）の中にさえ、インド以来の仏浄土の世界を具現しています。如来の単尊、如来三尊、如来と菩薩の三尊という風に、仏の自由な配列の構図によって、寺院装飾の一役を担ったものです。

飛鳥時代の刺繍の天人像（図10）は、たくましい体軀の正面向き坐像で、中国の飛天とは趣きを異にした、わが国仏教美術創始期の若若しさをさえ感じさせます。

ギリシャとイランの両様式を母体として、インド思想を人体像に表わした仏像の流れは、以上のように滔滔（とうとう）としてわが日本にまで及んだのです。

（村田靖子）

図8　金銅如意輪観音坐像

図9　金銅薬師如来立像

図10　刺繍天人像

季刊 美のたより No.83
昭和 63 年 5 月 27 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.